Chapter 31 : **恋の幸運＆レックウザ三度目の敗北 Part 1**

――そして現在。

今やただの名物判事ではなく、悪名高い法廷セレブとなったアーマーガア――ではなく、ティンカトンは、ついにあのバンギラスと再会した。場所は彼の豪華なエグゼクティブスイート。そこにはワリオウェアのグッズや金メッキのチキン像が飾られていた。

扉の前でティンカトンは足を止めた。今の彼がいかに金持ちになっているかに、思わず目を見張った。

バンギラスはスムージーを飲みながら、三人のアシスタントに違う方向から扇がれていた。

「おやおや。あのぶっ飛んだ判事じゃねぇか。」

ティンカトンはニヤリと笑った。「想像以上にリッチね、岩男。まだ独り身？」

「……まあ、一応な。」バンギラスは身を乗り出し、興味津々。

ティンカトンは遠慮なく、向かいの金のビーズクッションにドカッと座った。眉を上げる。

「真面目なパートナーとか、考えたことある？　ただ足元にすがるような相手じゃなくて、あんたを現実に引き戻すような――ぶっ叩く相手とか。」

「それってちょっと暴力的に聞こえるけど……悪くないな、それ。」バンギラスはまばたきした。

ティンカトンは前に身を乗り出す。「じゃあ、結婚して。」

沈黙。

バンギラスは背もたれに寄りかかった。「え、あー……」あの自信満々な空気が少しだけ崩れた。「結婚、か……重いな。」

彼は今の生活を思い出した。野生的で、混沌として、自由。それが突如としてティンカトンとの結婚に？　強烈すぎる。でも……それは新たな力のデュオになる可能性も？

ハンマーを構えて微動だにしない彼女を、バンギラスは見つめ返した。

そして――カオスのCEOが、珍しく、迷った。

＊

ティンカトンは、誰かの曖昧な返事を待つタイプではない。バンギラスが「はい」と言わないなら、この状況そのものを「はい」と言わせるまで。

一週間後――

ワリオウェア社のビルが、一時的に閉鎖された。メンテナンスではない。緊急の――結婚式イベントのためだった。

バンギラスのハーレム全員が困惑しながら立ち尽くす中、ティンカトン判事は階段を降りてきた。彼女のウェディングドレスは法廷ローブと戦闘用スカートが融合されたもの。ハンマーには白いリボンが巻かれている。

「ご婦人方、安心して。」ティンカトンはにやりと笑った。「あんたたちの男を奪う気はない。ただ、パーティーに参加するだけよ。」

黄金の廊下に、驚きの声が響き渡った。バンギラスのスムージーが爪から滑り落ちそうになる。

ティンカトンは凍り付いたCEOの前まで来て、リボンに包まれたハンマーの先で彼の頭を軽くコンと叩いた。

「一夫多妻条項。承認済み。あんたのためだけじゃない、あんたの法的カオス全体を安定させに来たの。」

ハーレムの一人がまばたきした。「えっ……そんなことできるの？」

別の子が小声で囁く。「もうやったみたいよ。」

バンギラスの顔色が数段階エメラルドグリーンに変わる。「これ……三つの地方で違法かもしれん。」

ティンカトンはハンマーをくるくる回す。「昨晩、婚姻法改正しておいたから平気。異議もなしね？」

沈黙。

そのとき、バラのバリスタの一人がツルをそっと上げた。「ケーキ焼いたら、私も参加できる？」

ティンカトンはにっこり。「一夫多妻制よ。覚えておいて。」

こうして書類は提出され、ニュースは爆発的に広がり、かつて拒絶された盗賊バンギラスは、今やティンカトン判事とそのハーレム全員と合法的に結婚。

人々は彼をこう呼んだ：

**「この十年で一番運のいいクソ野郎」**